

令和元年6月13日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04547

研究課題名(和文) 通級指導教室における言語面の支援ニーズに対応した指導方法の体系化と教材の開発

研究課題名(英文) Organization of instructional methods and development of instructional materials for language intervention according to the needs of children learning in resource rooms in elementary schools

研究代表者

大伴 潔 (OTOMO, Kiyoshi)

東京学芸大学・教育実践研究支援センター・教授

研究者番号：30213789

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：小学校の言語障害通級指導教室において指導を受ける児童の実態を明らかにし、指導方法を体系化することを目的とした。児童の主訴や認知・言語面の実態に関する事例的検討と、東京、神奈川、千葉の通級指導担当者を対象とした質問紙調査を実施した。通級利用児童の半数以上が言語発達の遅れを有することが示された。語彙領域の言語指導については、言葉について客観的に考えるメタ言語的活動、子供の言い誤りや言いよどみを捉えて語を教える、指導する語彙を選択して直接アプローチする等の指導方法に整理された。このほか、言語理解、言語表現、読み書き、文章の読解、コミュニケーションの各領域の改善を目指す指導についても体系化を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、文や文章の聴覚的理解、語彙知識、発話表現、柔軟性、リテラシー等の領域にわたるアセスメントから個人の発達のプロフィールを明らかにし、各児の課題に応じた指導法や教材を体系化し提案した。指導方法は多様であるが、通級による指導の場において教室間格差が生じないように学校間で指導方法を共有し、担当者の異動があっても児童に継続的な支援を提供できるような指導体制の構築の重要性が指摘された。

研究成果の概要(英文)：This study examined the proportions of students attending resource rooms according to types of speech-language difficulties, and instructional methods employed. A survey revealed that more than 50% of the students exhibited language delays. Instructional methods for vocabulary development were categorized into the following groups based on instructional goals: acquisition of new words, verbal explanation of meanings of words, smooth word finding, and use of words in contexts. Instructional methods for fostering receptive language, expressive language, reading-writing, comprehension of written texts, and communication behaviors were also organized.

研究分野：特別支援教育

キーワード：言語発達 通級による指導 学齢児 アセスメント 特別支援教育 通常の学級

1. 研究開始当初の背景

学齢児において、言語能力は学習のみならず学校生活での円滑な対人関係を支える重要なスキルである。一方で、言語発達に課題をもつ児童も多い。通常の学級に在籍する児童のなかで言語面や言語を支える認知面に課題を有する児童については通級による指導が行われており、通級指導を利用する児童の数は平成 20 年度の 46,956 人から平成 25 年度の 70,924 人へと大幅な増加傾向を示している(文部科学省「通級による指導実施状況調査結果」)。障害種別に割合を見ると、平成 25 年度は言語障害が 43.1%、学習障害が 13.8%などとなっており、多くの児童が言語面に支援ニーズを有する。言語発達面への対応は言語障害通級指導教室(学級)を中心に行われており、ここでは器質的または機能的な構音障害、吃音等話し言葉におけるリズムの障害、話す・聞く等言語機能の基礎的事項の遅れといった困難のある児童が対象とされている(文部科学省初等中等教育局通知 14 文科初第 291 号)。構音障害や吃音への指導は従来から数多く実践されてきたが、いわゆる発達障害のある児童の多くが認知発達の偏りとともに言語面にも課題を有することがあり、「話す・聞く等言語機能の基礎的事項」への対応も一層の充実が迫られている。従来から構音障害や吃音を主訴とする児童からの通級利用の要望が多く、これらの領域では教員研修の機会も多いが、言語面は「語彙/文法/談話」といった複数の言語の下位領域や「口頭表現/聴覚的理解」といった側面など多岐に渡るため、指導方法が模索されているという現状がある。このような複数の領域において重層的な発達が見られる言語面については、個別の指導計画の立案においても、アセスメントに基づく指導目標の設定と、指導目標に合致した有効な方法の適用が求められる。しかし、現時点では、指導目標や支援方法の枠組みが確立しているとは言い難い。

2. 研究の目的

本研究では、小学校の通級指導教室(学級)において言語面の支援を受ける児童の実態を明らかにすることを第一の目的に、通級指導教室(学級)における指導方法の実態を明らかにするとともに海外の指導に関する文献や学齢児の言語面の特性も踏まえて児童のニーズに応じた指導方法を体系化することを第二の目的とした。

3. 研究の方法

小学校の通級指導教室(学級)において言語面の支援を受ける児童の実態を明らかにするために、児童の主訴や認知・言語面の実態について情報収集を行った。言語面のアセスメント情報としては、LCSA(学齢版言語・コミュニケーション発達スケール)の結果を共通指標とした。1~4年生の76名について検討した。

通級指導教室(学級)において指導を受ける児童の全般的な実態と、用いられている指導方法について明らかにするため、通級指導の場を設置する東京都79校、神奈川県61校、千葉県167校の通級指導担当者を対象として質問紙調査を実施し、127校(41.4%)から回答を得た。質問紙は言語発達の遅れを主訴として指導を受ける児童について、児童の実態と具体的な指導方法に関する項目から成る。

4. 研究成果

言語面の支援を受ける児童の言語面のアセスメント情報としては、LCSA(学齢版言語・コミュニケーション発達スケール)の結果を共通指標とした。1~4年生の76名について検討したところ、WISC- または WISC- 知能検査による全IQは平均91.2(SD12.3)であった。LCSAの10の下位検査の評価点をもとにクラスター分析を行ったところ、現時点では以下の6つのクラスターに集約された:A.「音読」のみに顕著な成績低下のある群;B.「語彙知識」に低下のある群;C.「言語指示理解」と「柔軟性」は比較的良好であるが「音読」「読解」「慣用句・心的語彙」に低下のある群;D.「聞き取り文脈の理解」「慣用句」は比較的高いがその他は低水準である群;E.「音韻意識」「音読」「対人文脈」が比較的高い群;F.どの言語領域も低水準である群。これらは、語彙、文表現、音読といった各児童の困難領域と概ね対応し、下位検査間の個人内差は、児童ごとの発達のアンバランスさを明らかにすることが示された。言語により限局した苦手さを有する児童について検討するために、以下の3つの条件を加えたところ13名が抽出された:非言語性知能の指標としてWISC- の知覚統合群指数またはWISC- の知覚推理指標が90以上、LCSA指数が80以下、これらの非言語-言語指数値間に15以上の乖離がある。LCSAのプロフィールは6つのクラスターのうち上記のC、D、E、Fに分散しており、成績が低下している領域に個人差が大きいことが示された。これらの結果から、言語に特に発達課題のある児童のプロフィールは多様であり、個人の実態に合わせた指導目標と方法の設定が重要であることが示唆された。

東京都、神奈川県、千葉県の通級指導教室(学級)を対象にして指導方法の実態に関する調査の結果、通級を利用する児童の半数以上が言語発達の遅れを有していることが明らかになった。ただし、地域差もあり、千葉県では言語発達に遅れのある児童が46.5%、構音障害のある児童が60.4%と構音障害のある児童の割合の方が高かったのに対し、東京都では言語発達の遅れが53.5%であり構音障害の42.9%を上回り、神奈川県では言語発達の遅れが68.7%と3都県の中で最も多く、構音障害のある児童は36.5%であった。

さらに、通級利用児の語彙に関しては、語彙が少ない(94.5%)、語彙を想起するのに時間がかかる(70.9%)、間違った語彙を使うことがある(51.2%)といった実態が明らかになった。言語表現に関しては、積極的に話す何が言いたいのが伝わりにくい(78.7%)、短く単純な文で話すため細かい内容が伝わらない(73.2%)、文法的に誤った表現になることがある(67.7%)という実態であった。

調査結果や海外の指導に関する文献、学齢児の特性を踏まえて、学齢期における「語彙」領域の言語指導については以下の5つの指導方針が抽出できた：言葉について客観的に考えるメタ言語的活動(例：言葉の意味を別の言葉を使って表現する、似た意味の言葉を想起する、反対の意味の言葉を想起する)、子供の言い誤りや言いよどみを捉えて語を教える、指導する語彙を選択して直接アプローチする(例：時間や季節にかかわる言葉、位置を表す言葉、工芸や調理にかかわる言葉など意味的関連性を基盤として指導する)、文字を使い知らない言葉を視覚化する、言葉を学ぶ方法を学ぶ(例：知らない言葉に線を引く習慣をつける、言葉の意味について質問する習慣をつける、言葉の意味を辞書で調べる習慣をつける)。

「慣用語・心的語彙」領域では、意味の手がかりから慣用語を想起する、架空の状況に応じた気持ちを言葉で表現する、特定の心的語彙に対応する場面を想起する、登場人物の心情を表す文章を読む、ゲーム等の中で気持ちを言葉で表現する等の指導方針が抽出された。

「言語理解」にかかわる指導では、やり取りのある文脈、設定された活動、言語的文脈の中で言葉を聞いて理解する、理解する方策を活用する、などが抽出された。

「言語表現」に関する指導方法の回答の類型化からは、経験や活動に基づき語る、文法面または形式面で整った文や語りを産出する、手がかりをもとに言葉で表現する、言葉の意味を言葉で表現するメタ言語的活動、の4つの指導内容に整理された。

「読み書き」の困難については、フラッシュカードを用いて文字や単語をスムーズに読むことを目標とする指導や、拍単位への分解や特殊拍に焦点を当てた音韻意識の指導などが中心であった。音読の改善を目指した指導では、文節等の区切り等に横線を引くなど読みやすくするための工夫を取り入れたり、語をまとまりとして把握する単語検索課題を行ったりする学級が多かった。

「文章の読解」の改善にあたっては、文章の長さや内容の複雑さを調整した教材を用いたり、絵や図などの視覚的な情報を手がかりとしたり、文章で使われる語彙の習得を並行する指導などが行われていた。漢字の読み書きの改善では、漢字を部首等に分けたカードを作り覚えたり、漢字の書き方を言語化して覚えたりする工夫やタブレット端末の活用を挙げた回答もあった。

「コミュニケーション」領域の改善を目指す指導においては、ロールプレイやSSTカード等の使用を通して特定の場面などを想定して適切なコミュニケーション行動を学ぶ活動、自由会話や好きな活動における自発的発話の導出とやり取りへの展開、状況に応じた発話の促しなどに整理された。

本研究では、文や文章の聴覚的理解、語彙知識、発話表現、柔軟性、リテラシーの5領域にわたる10の下位検査によるアセスメント(LCSA)から個人の発達のプロフィールを明らかにし、各児の課題に応じた指導法や教材を体系化し提案した。指導方法は多様であるが、教室間格差が生じないように学校間で指導方法を共有し、担当者の異動があっても児童に継続的な支援を提供できるような指導体制の構築が求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

大伴 潔、溝江 唯、言語障害通級指導における指導方法に関する調査 言語表現・言語理解・コミュニケーション領域に焦点を当てて、東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要、査読無、第15集、2019、pp.107-114

金子寛智、大伴 潔、言語的能力と非言語的能力からみた幼児の状況説明力に関する検討、東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要、査読無、第15集、2019、pp.115-120

大伴 潔、言語障害通級指導における語彙を育てる指導方法に関する調査、東京学芸大学紀要総合教育科学系II、査読無、第70集、2019、pp.159-166

<https://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/151013>

佐野翔太、大伴 潔、語彙や文法面の力と状況説明力との関連について：典型発達児と言語コミュニケーションに困難のある児童との比較を通して、東京学芸大学紀要総合教育科学系II、査読無、第67集、2016、pp.365-375

<https://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/144710>

〔学会発表〕(計5件)

大伴 潔、読み書きに困難がある児童への通級による指導の実態 「ことばの教室」を対象とした指導方法の調査から、日本LD学会第26回大会、2017

Kiyoshi Otomo, Assessment of Language Development in Preschool and School-Age Children, 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing (APCSLH 2017)、2017

大伴 潔、「ことばの教室」を利用する児童の実態と通級において用いられる語彙指導の方

略

日本特殊教育学会第 55 回大会、2017

大伴 潔、通級による言語指導を受ける児童の言語と行動面の類型化～LCSA（学齢版 言語・コミュニケーション発達スケール）プロフィールのクラスター分析から～、日本 LD 学会第 25 回大会、2016

大伴 潔、SLI（特異的言語発達障害）の条件に該当する小学生の言語面の特徴 LCSA プロフィールのクラスター分析から、第 42 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会、2016

〔図書〕(計 3 件)

大伴 潔、林安紀子、橋本創一、学苑社、アセスメントにもとづく学齢期の言語発達支援 LCSA を活用した指導の展開、2018、174

大伴 潔 他、金子書房、第 7 章 話し言葉の発達と支援 藤野博編著 コミュニケーション発達の理論と支援、2018、63-72

大伴 潔、学苑社、言語発達遅滞児の支援 日本言語障害児教育研究会編著「基礎からわかる言語障害児教育」、2017、51-69

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：林 安紀子

ローマ字氏名：(HAYASHI, akiko)

所属研究機関名：東京学芸大学

部局名：教育実践研究支援センター

職名：教授

研究者番号 (8 桁) : 70238096

研究分担者氏名：橋本 創一

ローマ字氏名：(HASHIMOTO, soichi)

所属研究機関名：東京学芸大学

部局名：教育実践研究支援センター

職名：教授

研究者番号 (8 桁) : 10292997

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。